明治時代におけるホイッグ史観の受容

今井　宏

(一)

本稿はさきに筆者が発表した二つの論文、「明治時代におけるイギリス革命観」（『東京女子大学比較文化研究所紀要』第二十六巻、一九六八年）、「明治時代のピューリタニズム観」（同上、第三十二巻、一九七二年）の続編である。この二つの論文において、明治初年の「啓蒙」段階から明治末年に至る期間におけるイギリス革命とそれに知的エネルギーを供給したピューリタニズムに関する先人たちの理解の変遷をたどった筆者は、わが国の開国の時期がまさにイギリスにおける「ホイッグ史観」の整備・確立の時期に符合していたがゆえに、ホイッグ史観に立つイギリス史の把握が、それ以後のわが国のイギリスに対する認識に決定的な影を落とすことになった事実を指摘した。

ここにいうホイッグ史観とは、産業革命・アメリカ合衆国の独立・フランス革命という十八世紀後半の大西洋世界を襲った「革命の時代」の影響をうけて覚醒させられたイギリス・ラディカリズムの台頭を背景として形成され、以後今世紀二十年代に至るまでイギリスの正統史観たる地位を守りつづけてきた、歴史観である。この歴史観は周知のように、T・B・マコーレー（Thomas Babington Macaulay, 1800-59）の『英国史』*History of England*, 5vols., 1848-61 によってあざやかに定式化されたばかりでなく、幅広く受容された。このホイッグ史観のエッセンスはつぎの点に求められる。すなわち「恐怖と不安が数百万の人たちの顔を曇らせ、心を憂鬱にし」ていた十九世紀中葉のヨーロッパにあって、ただひとりイギリスのみが安定と繁栄を謳歌することのできた理由を問うたマコーレーは、一五〇年ほど前にイギリスが経験した名誉革命体制に、その秘密を解く鍵をみいだした。「われわれが十九世紀に破壊的な革命をもたなかったのは、十七世紀に保存的な革命があったからである。無政府状態の真只中でわれわれが秩序を保ったのは、隷属状態の真只中で自由を保持したからである。諸国民を意のままに興亡させたもう神のもとにあって、法の権威、財産の保証、街路の安寧、家庭の平和が守られたことに対するわれわれの感謝は、当然、長期議会、仮議会、

そしてオレンジ公ウイリアムに向けらるべきである」[1]。ピューリタン革命の主要な舞台であった長期議会が行なった一連の改革が、王政復古による反動の一時期を間にはさんで、名誉革命に際して仮議会の提出した「権利宣言」に継承され、しかもウイリアム（三世）がこの宣言を受諾して即位したことによって立憲王政が樹立された。この名誉革命の樹立した体制こそが今日のイギリスの安定した発展の基礎にあるという理解が、マコーレーの歴史観の中核をなすものであった。そのうえマコーレーは、このような名誉革命体制を生みだした原動力として、ホイッグ党に結集した議会政治家の自由を求めてやまない気高い闘争を高く評価した。その意味でマコーレーにとってのイギリス史の発展過程は、まさにホイッグ的な伝統の再確認のためのものであったのであり、しかも歴史とは、光であり善玉であると擬せられたホイッグ党ないしは議会が、闇であり悪玉とみなされた専制君主に挑戦し、後者を打倒・克服する過程に他ならなかった。

このようなホイッグ的な解釈に立つイギリス史の把握は、前稿で詳述したように、すでに福沢諭吉の『西洋事情』（初編および二編、明治元（一八六八）年～明治三（一八七〇）年）に原型として認められるが、それはさらに自由民権運動の高揚期に至ると、「悪虐不道ノ君主ガ圧制」に対する「自由ヲ唱ヘ民権ヲ主張スル」議会という対立パターンへと継承・深化された。その例が、これも先にみた、外山正一の『民権弁惑』（明治十三（一八八〇）年）にみられるイギリス史の解釈であった。このような著作を通して、ホイッグ史観がわが国に受容されている結果は確認しえたとしても、ここであらためて問わるべき課題は、このホイッグ史観の直接の確立者であったマコーレーの著作とその歴史観が、どのようにしてわが国に伝えられ、またどのような影響をもたらしたか、を追求することである。亜流ホイッグ史観ともいうべきT・カーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）に対するわが国知識人の傾倒については、前稿において主として平田久の『カーライル』（明治二十六（一八九三）年）と内村鑑三の諸著作を材料にして検討したので、本稿はいわばそれらの前提となったものを解き明かす作業といえるであろう。

マコーレーがわが国に残した痕跡を確かめるためには、まず第一に開国以来明治二十年ごろまで（下限を明治二十年ごろとした理由は、以下の行文において明らかとなるであろう）の時期に、どのようなイギリス史の叙述ならびに翻訳が刊行されたかをみておく必要がある。つぎに掲げるのは、高市慶雄氏の「幕末明治の英国史に関する文献」の年表[2]を、小沢栄一氏の詳密な研究『近代日本史学史の研究、明治編』（吉川弘文館、昭和四十三年）によって補正したものである。（最終の数字は巻数を示す）。

(1) 安政元（一八五四）年　正木篤『英吉利国記和解』一

(2) 安政元（一八五四）年　小野元済『英吉利広述』一
(3) 文久元（一八六一）年　慕維廉『英国史』五
(4) 明治二（一八六九）年　福地源一郎訳（柳河春三閲）『西史擥要』四
(5) 明治二（一八六九）年　渡部一郎『英国史略』一
(6) 明治二（一八六九）年　山口繁蔵訳『英国戦略』一
(7) 明治三（一八七〇）年　河津孫四郎訳『英国史略』二
(8) 明治四（一八七一）年　作楽戸癡鶯訳（河津孫四郎閲）『英国史略二編』二
(9) 明治五（一八七二）年　大島貞益訳『英史』十、附一
(10) 明治六（一八七三）年　和田義郎等訳『英吉利史略』二
(11) 明治六（一八七三）年　法貴発『英史沿革表論』三
(12) 明治六（一八七三）年　渋谷啓蔵訳『英史紀略』一
(13) 明治六（一八七三）年　関吉孝『英智史略』二
(14) 明治七（一八七四）年　大島貞益訳『改正英史』十、附一
(15) 明治八（一八七五）年　大島貞益訳『英国開化史』一
(16) 明治九（一八七六）年　河津祐之編『英仏百年戦記』四
(17) 明治十二（一八七九）年　土居光華・萱生奉三訳『英国文明史』六
(18) 明治十六（一八八三）年　土居光華訳『英国文明史』第七編
(19) 明治十七（一八七四）年　曽田愛三郎訳『大英近代史』二
(20) 明治十七（一八八四）年　佐藤覚四郎訳『英国革命史』
(21) 明治二十（一八八七）年　岩本五一『繪本通俗英国史』一
(22) 明治二十（一八八七）年　辰己小次郎抄訳『文明要論』一
(23) 明治二十二（一八八九）年　高橋達『英国叢談』一

ほぼ毎年のようにイギリス史関係の書物が公刊されているこの盛況は、当時のわが国の読者層の先進国イギリスに学ぶ意欲がきわめて強かったことを示してあまりないといえるであろう。ところでこれらの叙述・翻訳の典拠は何であったろうか。右の表のうち若干の注目すべきものについて、主として前掲の小沢栄一氏の研究を参照して、[3] 典拠を探ることにしよう。まず(7)と(8)は、古代から現代に至るイギリス通史の初の翻訳といえるものであったが、前者は「チャンブル、バルドウイン両氏の英国史からその要領を訳出した」ものであり、また後者は前者の続きを作楽戸癡鶯に訳させたものであった。つぎに(9)と(14)に移ると、(9)の改訂版である(14)には、訳者の大島貞益のつぎのような「例言」がみられる。

此書ハヒュームスミツス及チャンブル三氏ノ英国史ヲ本トシテ抄訳シ傍ラ諸書ヲ引用ス又政体ノ沿革等ハクレーシー氏ノ英国政体史及ヒヘンスマン氏ノ政体略記ニ拠ルモノ多シ

ここに挙げられた三冊のイギリス史は、それぞれD. Hume, *A History of England*, 1754-61; W. Smith, *Smaller History of England*, 1869; *Chambers's Educational Course: Modern History* をさすも

のと推定されている。このうちヒュームの『イギリス史』は、これよりさき箕作麟祥が『万国新史』（明治四（一八七一）年）を著述した際にも典拠として用いられているが、史学史的な見地からいえば、ホイッグ史観の成立以前にイギリスにおいて正統史観の座を占めていたトーリー史観の代表的著作のひとつであったことが銘記されねばならない。(14)によって(9)の改稿をなしとげた大島貞益は、その翌年、(15)の『英国開化史』を訳出している。これはいうまでもなく H. T. Buckle, *History of Civilization in England*, 2vols., 1857-1861の部分訳であって、これ以後ギゾーのものとならんで「文明史ブーム」をひきおこし、(17)(18)(22)と同書の翻訳が続いている。つぎに(19)は、J. McCarthy, *A History of our own Times*, 4vols., 1882 の、また(20)は著名なギゾーの原著のハズリット訳 F. Guizot, trans. by W. Hazlitt, *History of English Revolution* 1846 からのかなり自由な翻訳である。

以上の簡単な検討からも、つぎの三点はほぼいいえて誤りではあるまい。まず第一は、典拠とされている書物が、ヒューム、バックル、ギゾーを除いては、今日の史学史においてはとりあげられることのない教科書類が多いこと、第二に、これじたいは詳論を必要とする主題であるが、一時期人気の焦点となったバックルの『英国文明史』は、その素朴な進歩史観のゆえにホイッグ史観のひとつの亜流とみなしうるものであったこと、そして最後に、肝心のホイッグ史観の中心人物と目されるマコーレーに拠るものが、この著述リストには登場していないことである。わが国におけるホイッグ史観の受容を問題にする場合、マコーレーの痕跡はどこに探し求めればよいのであろうか。

註

(1) Macaulay, T. B., *The History of England*, Everyman's Library ed. in 4 vols., vol. II, pp. 380-1.

(2) 高市慶雄「外国文化関係年表」（『明治文化全集、第七巻、外国文化編』）昭和三十年、五六一ページ。

(3) 小沢栄一『近代日本史学史の研究、明治編』九二～七、一一八～二二、三〇五～一四ページ。

(二)

おそらくわが国に歴史家マコーレーの名前をもっとも早く伝えたもののひとつは、西周が明治三（一八七〇）年に書いた、諸学問の紹介のエンサイクロペディアともいうべき、『百学連環』であろう。西はマコーレーをつぎのように紹介している。

近来西洋に於て最も有名なる歴史家は Lord Macaulay 英人にして英国の歴史を著はし、実に system に適ひしものとす。(1)

しかしながら、マコーレーならびにホイッグ史観の受容史において、逸することのできない存在は、徳富蘇峰とその民友社グループである。そこで主として『蘇峰自伝』をよりどころとして、蘇峰の思想形成の過

程をたどってみることにしよう。[2] 熊本洋学校に学んでいた時期の蘇峰には別にイギリス史への関心が萌していたようにはみえないが、京都同志社への遊学時代（明治九（一八七六）年～明治十三（一八八〇）年）に、学友山崎為徳から「初めて……カーライル、マコレー、エマースン等の名を聴」[3]き、また浮田和民からはバニヤンの『ピルグリムス・プログレス』の訳読をうけたという。しかしマコーレーの著作に直接ふれたのは、明治十三（一八八〇）年、同志社の学内紛争にまきこまれて退学し上京したときのことであった。このマコーレーとの遭遇を『蘇峰自伝』は、つぎのように語っている。

予は明治十三年の秋、東京を去る以前に、或る古洋書屋の店頭から、一冊のマコレーのエッセーを発見し、それからそれを耽読し初めた。山陽は東坡の文を読み、初めて「天地間に此の如き文章ある乎」と驚嘆したと云ふ事であるが、予も又たマコレーのエッセーに就いてはしか云はねばなるまい。[4]

熊本に帰った蘇峰は、相愛社と称するグループに加わって、県下各地を政談演説してまわり、また『東肥新報』の編集を無報酬で手伝い、さまざまの変名を用いて、この新聞に文章を発表した。社説、論説、それに蘇峰の語るところによると「雑記として種々の翻訳ものを出した」。翻訳したのは、「マコレーのエッセー、若くはクロムウェルの伝など」であって「耽読したものを恥し気もなく翻訳したのだ」[5]ということである。やがて蘇峰の家には、英書を講読して貰うことを求めて、県立中学校の生徒が集まってくる。「予は彼等に向てマコレーのエッセー、ワルレン・ヘステングやクライブなどの評伝を講読した。固より予にもよく読めなかったが、兎も角も講読した。又た共立学舎の生徒の中にも、予の講義を聴んとして来た者があったから、彼等にはギゾーの『文明史』を講義して聴かした」。[6] ちなみに、蘇峰が講読した「ワルレン・ヘステングやクライブなどの評伝」は、元来マコーレーが *Edinburgh Review* に発表したものを、のちに *Critical and Historical Essays*, 1843 としてまとめたものである。蘇峰が東京の古本屋でみつけ、翻訳を発表し、生徒に講読したのは、この「マコレーのエッセー」なのであった。

このような土壌の上に、かれみずから自分の生涯において「一の記念すべき事」[7]と評価した、大江義塾の創立が現われる。大江村の自宅を用いて開設したこの義塾において蘇峰は、「数学を除けば、殆ど凡有る学課を教へ」[8]、「出来得る程度に於て専ら歴史、政治、社会、経済、文学等、手当り次第の本を読んだ」。しかし、つづけて蘇峰は書いている。「その中に於て最も予を益したのは、マコレーの『英国史』、プルタークの『英雄伝』、トクブウィルの『デモクラシー・イン・アメリカ(Democracy in America)』、趙翼の『二十二史劄記』等であった」[9]（傍点引用者）と。

通常、青年蘇峰の思想を形づくったものとして、つぎの三つが挙げられている。すなわちコブデン、ブライトのマンチェスター学派の自由主義、スペンサー流の社会進化論、そしていわゆる熊本バンドの流れを汲むキリスト教の三者である。ところで大江義塾開設の前年である「明治十四年二月九日」の日付けのある、「学問の目的」と題したかれのメモには

第一史学、第二文章学、第三経済学、右の通りに相定め候也。一切無用の読書を禁ず。詩歌は性情を養ふものなれば時々披見して可なり。新聞は時勢を達観するの具なれば時々読むべし。(10)

とある。たしかにこのメモは青年蘇峰の自戒のためのものであって、小沢栄一氏も指摘されるように(11)、このメモから蘇峰の学問的関心が歴史学に向けられていたという結論を導きだすのは早計であろう。しかし史学が第一におかれていることが注目されるのであって、しかもその史学の内容として蘇峰の意識のおそらく主要部分を占めていたのが、これまでみてきたようなマコーレーによって触発されたイギリス史への関心であったという推測は可能であろう。その証拠は、「左ニミルトンノ書ヲ握リ右ニクロムウエルノ剣ヲ提ゲテ社会ニ立ツ可キノ議論」(12)が大江義塾を支配していたことにも認められる。そのうえ若き蘇峰の思想を形づくっていたもののひとつ、マンチェスター派の自由主義とのかれの出会いは、この後に、換言すればこのマコーレーにもとずくイギリス史に対する認識の基盤の上に現われてくるのである。すなわち大江義塾設立の年の夏上京した蘇峰は、かねての念願かなって岐阜での遭難の傷のいえた板垣退助との面会を果たし、また田口卯吉、中江兆民、馬場辰猪らと会った。そして馬場からジョン・モーリー卿の『コブデン伝』(John Morley, *Life of Cobden*, 1881) とビーコンスフィールド(ディズレーリ)の評伝を貰った。

この二書は予にとって天啓であった。予はこれに依って初めて、ロード・モルレーを知り、コブデンを知り、ブライトを知り、——固よりコブデン、ブライトの名は、同志社にて経済学を、ラーネッド氏に授った時に聴いたが——マンチェスター・スクールを知る事が出来た。元来予の政治思想は、横井小楠から発足し、新島先生の基督教の感化を受けたものであって、マンチェスター・スクールの論旨が予に感応したるは、拾も水乳投合したる趣があった。(13)

帰郷後の蘇峰は、大江義塾における教授と読書の研鑽をつづけるかたわら三つの論文を自費出版した。その第一が『明治二十三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ズ』(明治十七(一八八四)年)であるが、そのなかで新時代を担うべき「改革政治家」は、「日ク学者ニシテ壮士ヲ兼ネザル可カラズ、壮士ニシテ学者ヲ兼ネザル可カラズ、即チ今日ノ改革者ナル者ハ左手ニミルトンノ書ヲ握シ右手ニハンプデンノ剣ヲ提ゲザル可カラズ」(14)と論じられている。これはまさに先に引用した大江義塾を支配した雰囲気を

そのままもちこんだ議論であるが、ミルトンはそのままであっても、かつてのクロムウェルがここではかの船舶税事件のヒーローであるハムデンに代わっていることが、やや興味をひくであろう。自費出版はさらに『自由・道徳及儒教主義』(同年)、『第十九世紀之青年及其教育』(明治十八(一八八五)年――のち明治二十(一八八七)年に『新日本之青年』と改題して刊行)とつづき、自由民権運動の退潮と鹿鳴館時代の開幕という時代の転換を背景にして、青年蘇峰の言論活動が展開されてくる。

ところでこの段階までの蘇峰の思想内容を点検した隅谷三喜男氏が、それを構成する前述の三本の柱とならんで、かれの発想様式そのものにひとつのはっきりした特徴があることを見出しているのは、卓見といわねばならない。隅谷氏の主張を引用しよう。

かれの思想の特色はもう一つ、その発想様式にある。この点での基本的特色は、社会現象の把握やそれを認識する思想の二元論的性格である。かれは自分の観察の網の目に入ってくるものを、すべて二元的に把握する。封建と近代、貴族的社会と平民的社会、武備と生産、旧日本と新日本、といった類である。それらは多くの場合相互に排他的で、後者が前者にとって代わる社会的進化の段階としてとらえられた。ここから若き蘇峰のラディカリズムが形成されたのである。その発想は一面からいえばきわめて素朴であり、そこに思想の限界があったわけであるが、他面ではその単純さが社会にアッピールする一つの武器となっていた。(15)

ここに分析された蘇峰の発想様式の特色は、そっくりそのままホイッグ史観にあてはまる。ホイッグ史観の特色は、議会と国王、自由と専制、ホイッグとトーリーという一連の対極概念による歴史の裁断、しかも現在の基準に照らして、歴史を光が闇を克服していく進化の過程として把握する点にある。この点からみて、蘇峰の基本的な思考パターンを育てあげたものは、まさにかれが「耽読した」マコーレーの『エッセー』であり、『英国史』であったといえよう。かれの最初の本格的な著述である『将来之日本』(明治十九(一八八六)年)においても、腕力世界と平和世界、武備主義と生産主義、貴族社会と平民社会という二元対立の思考パターンが支配しており、この一連の対極概念のそれぞれの後者が前者を克服するところに世界の大勢があると認識されているのである。「世界の境遇は実に生産的の境遇なることを発明せり。……天下の大勢は実に平民主義の大勢なることを発明せり」。(16) この二元論的思考パターンのもつ説得性、そしてこの論理を彩る輝かしいオプティミズムにこそ、蘇峰の大衆的人気の秘密があったのであり、また同様にそれはかつてのマコーレーの成功の秘密に他ならなかったのである。この著作は、「予の当時有する総ての思想、一切の知識、凡有る学問を傾倒し盡さんと企て」、しかも「この著述の草稿を三度書き代えた」(17)ほどの苦心作であっただけに、それが生んだ反響の大きさは蘇峰をして大江義塾の閉鎖、一家をあ

げての上京、東都の論壇における活躍という決意を堅めさせた。このとき二十三歳の蘇峰の脳裡にあったのは、一八二五年、『エディンバラ評論』に「ミルトン論」を発表して華々しく文壇に登場した二十五歳のマコーレーのことであった。『蘇峰自伝』はつぎのように語っている。

何れにしても、『将来之日本』は、将来の日本の為に如何なる効果を与へた歟を知らざるも、著者たる将来の徳富の為には、鮮からざる便宜を齎した。予は決して『将来之日本』が出た後の徳富が『ミルトン論の出た後のマコレーと、同一程度に世間の評判を博したと云はぬが、正直の処、評判はなかなか盛んであつた。(18)

上京の翌年の明治二十（一八八七）年に民友社が設立され、雑誌『国民之友』が創刊される。翌年この誌上で蘇峰が主張したいわゆる「田舎紳士論」については、前稿で若干触れたので、ここでは省略する。ところでこの時期の蘇峰の教養と意識についてはなはだ興味のある指摘が、笹淵友一氏の研究にみられる。(19)それは、蘇峰の文学論の処女作である「近時流行の政治小説を評す」（『国民之友』六号、明治二十（一八八七）年）から明治二十六（一八九三）年に至る時期に発表された、かれの文学論文約三十編の中に引用されている、西欧文学者の頻度数である。それによると、バイロン(11)、ワーズワース(9)、ミルトン(9)、マシュー・アーノルド(8)、マコーレー(6)、ユゴー(6)、シェイクスピア(5)、エマースン(5)、ホーマー(3)、ダンテ(3)、ゲーテ(3)、テニソン(3)の順となる。もちろんこの頻度数のみから、蘇峰の読書範囲と思想傾向について結論めいたものをひきだすことは早計であろう。しかし少なくともこの表から、文学者に英米系が主流を占めていること、また笹淵氏が指摘されるように「蘇峰の文学意識が伝記的資料によって推定したものよりも、更にロマンティック文学に傾いてゐること」は明らかである。このことよりもわれわれの興味を惹くのは、笹淵氏の調査の下限である明治二十六（一八九三）年から、他ならぬ蘇峰の主宰した民友社が刊行を開始した、『拾貳文豪叢書』とこのリストとの関連である。この叢書には、号外を含めて八人の西欧文学者が選ばれているが、名前を挙げれば、カーライル、マコーレー、ワーズワース、ジョンソン、ゲーテ、エマースン、トルストイ、ユゴーがそれである。そしてこの叢書においてマコーレーを執筆したのは、明治二十三（一八九〇）年の創刊以来『国民新聞』で蘇峰の片腕となって活躍していた、竹越与三郎（三叉）であった。そこでわれわれは、竹越の場合のホイッグ史観の受容に眼を転じることにしよう。

註

（1）『百学連環』は、『西周全集』昭和三十五年版（大久保利謙編）には収録されていないため、みることができなかった。大久保利謙「西周の歴史観」（明治史料研究会編『近代思想の形成』昭和三十四年、御茶の水書房、二六七ページ）を参照。

(2) 蘇峰の精神形成過程を辿るのに、幾多の屈折を経た晩年の著作(昭和四(一九二九)年『改造』に連載、昭和十(一九三五)年中央公論社より刊行)である『蘇峰自伝』のみを典拠とすることに問題があることはいうまでもない。筆者の蘇峰理解は、色川大吉氏のすぐれた研究「徳富蘇峰論」(『歴史評論』、九四、九七号)、「明治二十年代の文化」(『岩波講座日本歴史』近代4)に教えられるところがきわめて大きかったことを附記しておきたい。

(3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』昭和十年、中央公論社、一〇六〜七、一四七〜八、一四七〜八、一五一、一四九、一五三、一八九〜九〇、一四九ページ。

(11) 小沢栄一、前掲書、五三六ページ。

(12) 『大江義塾沿革史一斑』

(13) 『蘇峰自伝』、一八一ページ。

(14) 隅谷三喜男「明治ナショナリズムの軌跡」(『日本の名著、40、徳富蘇峰、山路愛山』、昭和四十六年　中央公論社)、一三ページより引用。

(15) 同右、一七ページ

(16) 『将来の日本』、同右、一八〇ページ。

(17) (18) 『蘇峰自伝』二〇〇、二二一ページ。

(19) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』、昭和三十三年、明治書院、五五一〜二ページ。

(三)

明治三十四(一九〇一)年六月、正岡芸陽は雑誌『新声』に書いた「竹越三又」という記事をつぎのように書きおこしている。

竹越三又の名を聞くと同時に聯想するのはマコウレーとハイカラーとである、マコウレーは実に彼の未見の師であつて、彼の今日あるのは実にマコウレーに負ふところが多いのである、独りマコウレーの文章に負ふところ多きのみならず、マコウレーの人物性行に私淑するところ甚だ多いので、彼を論ぜんとせば、必ずマコウレーと彼とを比較せねばならぬ。(1)

この記事が出た時点の竹越は、第一回のヨーロッパ旅行から帰朝したばかりであって、すでに政界入りの決意を堅めて、政友会の結党に奔走しており、翌年八月の総選挙に郷里の新潟から立候補して初当選を果たすのである。この記事からして、ジャーナリストから政界人への転換期に位置していた竹越を「日本のマコーレー」とみる世評はすでに高かったとみなければならない。(2) 竹越の著作にマコーレーの影響がもっとも強く現われるのは、明治二十三(一八九〇)年から同二十八(一八九五)年までの六年間の民友社時代であるが、それ以前のかれの経歴において注目されるのは、中村敬宇の同人社から福沢諭吉の慶応義塾へというかれの学歴と、明治十九(一八八六)年以降二年間の群馬県における教師としての活動である。前者については、中村、福沢を媒介とする英学的教養の形成が予想されるが、マコーレーとの接触を確かめうる史料は残されていない。ただこの段階での竹越について見逃し難いのは、かれのキリスト教との接触である。竹越の群馬行きは、霊南坂教会の小崎弘道の推薦によるものであって、かれは明治十八(一八八五)年、前橋教会に赴き、翌年そこに英学校を開設した。この英学校で竹越が用いた教科書

には、ギゾーの『文明史』やスマイルズの『自助論』の他に、マコーレーの『エッセー』があったといわれる。さてこの前橋時代の竹越について注目すべきことが二つある。[3] 第一は、竹越が幹事に選ばれた「上毛青年会」が中心となって、全国でもっとも早い時期に廃娼運動を展開したことであり、第二はのちに民友社の財政上の援助者となる安中の湯浅治郎を通して、蘇峰との接触が始まったことであった。廃娼運動の紛争から前橋を退去した竹越は、高崎の猶興学館で講義し、また高崎英学校の開設を助け、そこでも教鞭をとった。竹越の最初の著作である『英国憲法の真相』は、バジョットの『イギリス国制論』(W. Bagehot, *English Constitution*, 1867) に基くものであるが、この高崎時代（明治二十（一八八七）年）に刊行されている。

やがてかれは小崎弘道の『基督教新聞』の編集人を数ケ月つとめたのち大阪公論に転じて論説記者となり、明治二十三（一八九〇）年一月、国民新聞に入社して、以後六年間の民友社生活を始めることになった。しかしながらこの間において竹越は、『基督教新聞』や『六合雑誌』などにも活潑な寄稿を行ない、キリスト教界の論客として知られており、また霊南坂教会の青年会員として熱心に活動している。この時期（明治十九（一八八六）年～明治二十三（一八九〇）年）のキリスト教会の最大の問題であった、組合、一致両教会の合同問題に際しては、組合教会の教会機構にみられる、自由主義的かつ民主主義的な傾向を守ろうとして、合同反対の急先峰として行動した。[4] そしてついでいわゆる「内村鑑三不敬事件」以後露骨になったキリスト教排撃の動きに対しても、事件の翌年（明治二十五（一八九二）年）、植村正久、本多庸一、井深梶之助などの当時のキリスト教界の錚々たるメムバーと共に、熊本県における弾圧への抗議書を発表し、またみずからも『国民新聞』において信仰の自由を主張したのであった。

さて民友社時代の竹越の第一作が、さきに詳細に紹介した、『格朗窓（クロムウェル）』（明治二十三（一八九〇）年）である。この著作を貫くかれのクロムウェル観は、蘇峰の提唱した「田舎紳士」論にピューリタニズムを接木することにあったが、前著の「田舎紳士」は必ずしも蘇峰のそれの模倣というよりは、かれ自身の生家が越後の柿崎で庄屋をつとめていた名望家に属していたところから生れた現実感覚に立つ把握であったし、また後者のピューリタニズムについてはかれの属した組合教会はピューリタン革命の中心勢力であった独立派の後裔であったことが銘記されねばならない。独立派を率いて戦ったクロムウェルは、竹越にとって、このように二重の意味での親近感をいだかせた人物であったのである。しかしながらこの『格朗窓』には、引用文献としてマコーレーの著作が列挙されているものの、その直接的な影響は弁別し難い。ところが民友社史論史学の代表作という地位を築きあげた、かれの『新日本史』（上巻、明治二十四（一八九一）年、中巻、明治二十五（一八九二）年、

下巻、未刊）と『二千五百年史』（明治二十九（一八九六）年）には、はっきりとマコーレーに倣って歴史叙述を企てるというかれの意図が打ちだされているのであり、この二つの歴史書の中間に、前述した『拾貳文豪』叢書の一巻として『マコウレー』（明治二十六（一八九三）年）が著述されているのである。

『新日本史』の中巻には、「新日本史に題す」として、竹越みずから自身の執筆趣旨を語る序文がつけられている。それは上巻刊行後に現われた書評の多くが、竹越の意図を誤ってうけとっていたことを遺憾としたためであった。その中でかれは、自分の意図は、細大もらさぬ記録史を書くことでもなければ、また「考証派の歴史」を書こうとしたのでもなく、維新後わずかに二十年しかたっていない現在、「維新の大目的を失忘して、邪径に走らん」としている傾向がみられることに「慨然」として、この『新日本史』によって維新以来の「世変の大綱」の叙述を企てたと述べ、さらにつぎのようにいっている。

故に其史筆は一にマコレーの英国史中、開国より、ゼームス二世の失政の幕に至る間に倣ひ、大綱裁然として一目の下に分明ならしむることを目的とす。(5)

またこの序文には、竹越の「歴史上の見解」も述べられており、そこには理想的な史書の備えねばならない五つの「標準」――「第一　人物……第二　人物の心理的解剖……第三　国民特有の気質……第四　時代歴史は猶ほ地層の如し……（第五）　史家は謹厳なる法官たるのみならず、英霊、高崇の心胸ある詩人ならざるべからず……」――を挙げているのであるが、その前提として何人かのヨーロッパの歴史家の長短を論じており、「マコレーの史伝の如くならん乎、人物に重きを置きて、時勢を軽んずるの憂あるを奈何せん」(6)という批判をマコーレーに対してむけている。『新日本史』がマコーレーの「史筆」に倣うというのは、構成だけの問題に限られるのであろうか。直接かれの『マコウレー』について、竹越のホイッグ史観受容を問題にしなければならない。

『マコウレー』は、㈠「批評家として」、㈡「政治家として」、㈢「歴史家として」の三部構成をとって、マコーレーの人と思想と業績とを総合的に論じている。典拠は示されていないが、その引用からみて G. O. Trevelyan ed., *Life and Letters of Lord Macaulay*, 1876 を参照したことは疑いない。まずマコーレーの『英国史』が成功を収めた理由を、竹越がどのようにみていたかを検討することにしよう。かれのあげる理由はつぎの七つである。

第一、彼は生ながら(ママ)にして歴史家也。……

第二、彼は談話するが如くに歴史を書けり。……

第三、彼の歴史は小説にして、理論を兼ね、詩歌にして、哲学を兼ぬ。……

第四、彼の歴史は恰かもパノラマの如し。読者をして中心に立ち

て、四方を望見するの感あらしむ。……

第五、彼の歴史は無識なる学者の歴史にはあらず、政治家の識見あり、政治家の経験あり、之に加ふるに学者の理論と、紳士の冷静とを以てせる生ける歴史家の歴史也。……

第六、彼の歴史は個人的性質に富めり。……

第七、其の脳髄の明白なるにあり。……(7)

以上の七点のそれぞれに竹越の注釈がつけられているが、就中かれが強調しているとみられるのは、第二、第三、第五、第六の四点である。第二の叙述スタイルの点については、マコーレーが難解な語句も複雑な論理も用いていないため、あたかもかれの語る談話に耳を傾けるかのようにその歴史の世界に読者は引きこまれるのであって、かれが「哲学と詩歌と、歴史とに、平民の衣服を着せしめて、其の歴史に現わし」たがゆえに、「平民的の歴史は平民に愛読せらるべき運命を有す」のも当然であったと評価されている。このマコーレーの採用した叙述スタイルの特徴が、その「歴史は小説にして、理論を兼ね、詩歌にして、哲学を兼ね」という第三の成功理由につながるのであって、この点で竹越は「彼の歴史は殆んど此理想的歴史に近づきぬ」という最高ともいえる讃辞を呈しているのである。つぎに政治家の識見と経験に理由を求めた第五点においては、竹越は当時マコーレーと並び称されたギボンとの比較論を展開し、「キッボンは溝にしてマコーレーの如く川にあらず。集め細工にしてマコーレーの如く文理ある大理石にあらず。而して此優劣は、政治家の活識の有無によらずんばあらず」としている。ただし「政治家の活識」というのは、決して「政略家の便宜論」をさすのではない。マコーレーの歴史があれほどの読者を獲得したのは、「其の文章の妙にあらずして、此政治的の知恵の充満し、之を読むは学者の空言を聴くにあらずして、世故を経たる大人が、其経歴を説話し、批評し、己若しあらば、此く此くに施設すべかりしならんと論ずるを聞(ママ)が如し」。これが『英国史』の愛読された秘密のひとつである、というのである。第六のマコーレーの歴史が人物を中心に据えたものであるという指摘については、十九世紀のヨーロッパ史学界の潮流についての竹越なりの理解があったことを、見逃すことはできない。すなわち、近来の歴史は科学としての性格を強調し、「需要供給、食物の養料、風土の善悪は、歴史上の事実を判断する唯一の材料となり、物質は凡べての物となり、道理、名誉、品格、道徳、宗教、人物、人情は、凡べて歴史より引き抜かれ」てしまった。このような傾向が強まったのに対して、マコーレーと同時代のカーライルは、反動的に英雄崇拝論に走り、エマースンもまた同傾向についた。ところがマコーレーは、歴史の科学性の主張とその物質尊重には同意しなかったが、「然れども英雄崇拝論までは走らず一方には文明史的の主張と、一方には英雄論は主義を調和して、其の歴史を作」ったのであって、「吾人はマコウレーの歴史に於て初めて、人間らしき人間を

見る」ことができるし、また「奔放雄大なる大勢の図画に」この人物を配したかれの「史躰」こそが、その魅力を形づくっていた、というのである。このようにみてくるならば、『新日本史』中巻において竹越が提示した「理想的の歴史」の「標準」は、マコーレーの『英国史』の成功理由から竹越がひきだしたものであるということができよう。

このように歴史家としてのマコーレーに対して賞讃を惜しまなかった竹越ではあるが、マコーレーの欠点に対して眼をつむっていたわけではない。竹越によれば、その欠点は「哲学的の深奥を欠くの一事」[8]につきるのである。しかしながら全体としてのマコーレーに対する評価としては、かれはこの欠点に対してむしろ寛容であり、逆に賛意と同感とを表明しているようにみられる。竹越にとって、マコーレーは「英人中の英人」「紳士中の紳士」であり、しかも「天を怨みず、人を尤めず、常に悲哀を去つて快活に就き、世の暗黒の半面を去つて、輝ける半面を見るを楽しむ……楽天的の紳士」[9]「楽天的現世教の信者」なのであった。[10]この把握を裏づけているのは、マコーレーの時代の思想状況に対する竹越の認識である。まさに時代は「欧洲大陸革命の火焔」がイギリスを襲わんとしていたのに対し、イギリスでは「道義的復活」がみられ、しかも「自由民政と道徳と手を携えて歩行」[11]した。そしてこの十九世紀前半の「英国道義感情の復興」こそ、マコーレーとカーライルの二人の功績であり、その意味でマコーレーは「真箇の英人」であり、「功も過も皆な英人を代表」している、とするのである。マコーレーとカーライルの二人の思想的位置づけを、ベンサム＝ミルの功利主義（竹越によれば「実利主義」）に対する批判に求めた竹越は、つぎにマコーレーとカーライルの相異を論じている。すなわち「人生の観察には二個の主義あり、一は哲学を主として、理想に照らして、人生を観察する也。一は歴史を主として、一切の人事、歴史の光を以て読まんと欲す」として、前者を「改革者」、後者を「政事家」とよび、前者の代表にカーライルを、後者の代表にマコーレーをあてるのである。[12]それではこの「政事家」の歴史把握には、どこに特徴が認められるのであろうか。

マコーレーの主要な著作を逐次検討した竹越は、かれが十七世紀のイギリス革命を論ずることに力点をおいた理由を明らかにすることを通して、この問題に接近している。この点でマコーレーの欠点と考えられた「哲学的の深奥を欠く」ことが、深く関連してくるのである。というのは、マコーレーが帝王神権説を排撃するにあたって、「彼れ哲学嫌ひなるが故に、第一原理より之を排撃せず、歴史と常識とによりて之を排撃」[13]したのであって、処女作「ミルトン論」以降の十七世紀に主題を求めた諸エッセー、また『英国史』も、「事実と常識とによりて、帝王神権の暴論を排して、自由民政の光輝を発揮せんと欲」[14]したことが、著述の一貫したモチーフであったというのである。しかし同時にマコーレーがヴィクトリア朝イングランドの「現代の謳歌者」であり「楽天的現世

教の信者」であったことが、かれの思想と政治家としての行動を規定したと考える竹越は、「彼が自由民政に対しては、情炎とも云ふべき熱中を有しながら、其熱心が如何に楽天教のために制せられて、現在秩序説となりて来りしかを」[15]みることが、マコーレー評価の要であるとしているのは、卓見であるといわねばならない。ここにいう「現在秩序説」とは、「自由を尊べども道徳を離れず、民政を尊ぶも、秩序を忘れず、二者の分離は国乱の基なりと信」[16]じて、「重きを国家に置く者」のことをさしているからである。

このような視点からすれば、政治家としてのマコーレーの活動を追う竹越の叙述が、選挙法改正、東インド会社改革などの問題に関するかれの演説に、二世代前のエドマンド・バークEdmund Burkeの演説を絶えず引き合いに出しているのも、いわば当然とみることができよう。ことに一八三二年の総選挙に出馬したマコーレーの選挙区に対する演説に、バークの「議員独立論」と同じ趣旨の発言をみいだしており、また一八四七年の総選挙に敗れて政治家としての活動から退いたマコーレーを結ぶにあたって、竹越はかなりのページを費して、マコーレーとバークの比較論を試みている。まず両者の相似している点については、つぎのように説かれている。

彼（マコーレー）は政治家としてはボルクに似たり。其の自由に熱中し、民政を愛慕し、古代の自由民政を見ること黄金時代の如く、歴史上の圧抑（ママ）者を見ること、恰かも己が頭上に打撃を加ふる者を見るが如くなると相似たり。其不正不法を憎むこと、仇敵の如くなること相相（ママ）似たり。其議論の崇高なること平凡なる政略家の上に出で、正義と人情と体面と道徳の上に築かれたるや一也。殊とに其士人の躰面と正義に向って全力を盡くし、一代の道義感情を鼓舞し得たるや相似たり。確固たる一の主義を似て、凡べての事に応用すること眼目の如くなること相似たり。彼等は均しく近世の実学を味へるものにして、人間社会に於いても、物質界の如く大理大法の行はるること、明白確固なるを信じたり。彼等は均しく、売買、権義、得失、放任、干渉等の乾燥無味なる文字を似て万事を推測せんとする社会に、感情の滑油を与へたり。彼等の演説、均しく雄弁滔々として、歴史と事実に富み、均しく政治的の智恵を与ふること大且つ深かりき。……而して其の最も相似たるは、自由を愛するの熱は燃ゆるか如くなるに係らず、其の政治に関するや、秩序、国民の念は、凡べての念慮を抑へんとす。[17]

また竹越は、チャーティストが人民憲章を提出した際のマコーレーの「憤怒」を述べ、「若し彼をして十八世紀の終にあらしめば、仏国革命に向って憤激、痛責の声を起せしものはボルクにあらずして、彼なりしならん」[18]とさえ断言するのである。たしかに「革命的民政の分子」に対する武力弾圧を唱えたバークと、「外国の民政的立憲的の分子」の援助

を主張したマコーレーとの間には、一見して相違が認められる。しかしそれも、竹越によれば「時勢の差異」にすぎないのであって、「ボルクをしてマコウレーの時代にあらしめ、マコウレーをしてボルクの時代にあらしめば両者地を替へん」[19]とされているのである。このように、イギリス的な保守主義の系譜的な展開をバークからマコーレーに至る路線に認めて、ひいては両者の政治哲学の類似性を強調した竹越も、両者間に存在した差異を看過しているわけではない。しかしながらここでも、差異は「マコウレーがボルクに及ばざる所は、其哲学的深奥を欠く」点に求められ、逆にバークのマコーレーに劣るところは、「冷静なる判断を欠く」点に求められているにすぎない。[20]

註

(1) 正岡芸陽「竹越三又」(『新声』五―七) 一二ページ。

(2) 竹越与三郎の経歴については、嗣子竹越熊三郎氏の作成された「竹越三又年譜」ならびに「竹越三又資料目録」による。他に中村哲「竹越三又の史論と政論」(『法学志林』五九―一) を参照した。

(3) 近代日本プロテスタント教会史において、群馬県の占めた独特の地位については、隅谷三喜男、森岡清美両氏によるすぐれた研究の蓄積がある。隅谷氏の『近代日本の形成とキリスト教』(昭和二十五年、新教出版社)、「群馬蚕糸業の展開とキリスト教」(内田義彦・小林昇編『資本主義の思想構造』、昭和四十三年、岩波書店)、森岡氏の「日本農村における基督教の受容」(『民族学研究』十七―二、のち明治史料研究会編『近代思想の形成』に収録)、『日本の近代社会とキリスト教』(昭和四十五年、評論社) を参照。

(4) 霊南坂教会の青年たちの合同反対理由はつぎのとおりであった。「由来組合教会は自治を旨として教会を組織し、会員の意見によりて進退し、会員の組織によりて一の教会を為せり、会員は其主たるもの也。教会は其団体組織の結果たり。教会ありて会員あるにあらず、会員あって後に教会あり、故に其一般の政治は悉く彼等の決議に待たざるべからず、これ組合教会の我儕にとりて貴き所以にあらずや」(『霊南坂教会略史』、大正六 (一九一七) 年、三九ページ)。また湯浅與三『伸び行く教会』、昭和十六年、教文館、一〇五～一二ページを参照。

(5)(6)『新日本史』(松島栄一編『明治史論集㈠』、明治文学全集77、昭和四十年、筑摩書房) 一三一ページ。

(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13)(14)(15)(16)(17)(18)(19)(20) 竹越与三郎『マコウレー』、一八二～一九四、一九七、一二、五七、八、八〇、四八、五〇、七五、一六九、一六五～七、一七〇、一七三、一七三ページ。

(四)

以上の紹介で竹越のマコーレー把握の要点はほぼつきていると考えられるが、「ホイッグ史観の受容」という視点からすれば、やはり大きな問題が残されていたといわねばならない。マコーレーの欠点を「哲学的深奥を欠く」点に認めた竹越は、かれの本領を「批評家」であった点に求めている。ここで「批評家」というのは、「天下の思想を発揮し、湊合し、融通し、混和し、天下の恩恵を万民に普及せしむる」ことをもって本務とする、啓蒙家の意味でとらえられているのであって、したがって

マコーレーは独創的な思想家でもなければ、一派の創始者でもなかったことが強調されるのである。[1] 竹越はいう、「彼れ固より自由民政の哲学的識別を為さざりき、然れども自由民政は彼の筆によりて天下に宣伝せられたり」[2]と。問題はこの「自由民政」の宣伝の方法にあったのであり、そこに、自由と専制、議会と国王といった一連の対極概念で処理して、前者が後者に対して勝利を収める輝かしい進歩の過程を現在的な視点から追認する、かのホイッグ史観が姿を現わすはずである。マコーレーが「楽天的現世教の信者」であったのは、このホイッグ史観に支えられてのことであった。ところがホイッグ史観の史実認識と論理構成と叙述方法がまったくといっていいほど問われていないのが、竹越のマコーレー把握の最大の問題点であったといわねばならない。

本書の初版の発行に際して寄せられた多くの書評のうち『文学界』はつぎのように書いている。

今の文壇に立ちて健全なる英国思想を代表するのは問わずして蘇峰氏の民友社なるを知る、まことに空理をしりぞけて現実を尚び、虚想を排して常識を重じ、ひろく眼を一般に注ぎて智識文学を国内に普及したる年来の事業は、世間の永く記臆して忘れざるものなるべく、今この社中よりしてマコウレーの如きの紹介せらるゝは、如何にもふさわしき事といふべし。[3]

当時の読書界が、この書評にみられるように、民友社、竹越三又、マコーレーの三位一体であるこの書物を、まさに時宜にかなった企画としてうけとったことが伺える。しかしながら竹越は、前年に刊行した『新日本史』中巻の題言に、前述のように、「マコレーの史伝の如くならん乎、人物に重きをおきて、時勢を軽んずるの憂ある奈何せん」という批判をもらしていた。また『マコウレー』の巻頭には、「余が此にマコウレーを論ずるものは、余が彼を崇拝するがためにあらずして、其の最も論じ易きがため也。十分の同情は其美を知るに足り、十分の冷静は其欠点を知るに足ると信ずるが故也」[4]と述べている。世評とは別に、竹越はマコーレーから一定の距離を保つことを意図しているといわねばならない。

ところで「如何なる歴史が真の歴史なる乎」を問いつづけた竹越は、これも『新日本史』中巻の題言において、先述のように、理想の歴史が備えるべき五つの「標準」をあげていた。そして「余は思ふ、史家は謹厳なる法官たるのみならず、英霊、高崇の心胸ある詩人ならざるべからず、満心の熱情を以て、古代の人物に同情を表せざるべからず、然らずんば何ぞ能く、其の時代の特性を写し出すを得んや」と述べて、およそホイッグ史観とは逆に、現在的な視点からの歴史の裁断を排斥し、さらに「而して此の如くして得たる材料を安排するに、コットル モリソンがマコレーを評したるが如く、『ヒウムの論辨とサッカレーの叙事筆』を兼備せば初めて完全なる歴史と称するを得べしと余は信ずる也」[5]と結

論づけているのである。ここにみられるように、竹越にとってマコーレーは必ずしも理想の歴史家たるの条件を完備した人物ではない。そのうえマコーレーが批判の対象として取り組んだ、十八世紀イギリスの正統史観たるトリー史観を代表したヒューム、竹越によれば「彼は老吏、獄を断ずるが如(ママ)して、議論多きにすぐ」[6]ヒュームの「論辨」を叙事的な才筆とあわせ備えねばならないとしているのである。こうみてくるならば、竹越においては、トーリー史観とホイッグ史観の対立的側面の認識はなく、またマコーレーを後者の代表として位置づけ評価しようとする視角も欠除している、といわざるをえないであろう。

それならば、竹越がマコーレーから学んだものははたして何であったろうか。『マコウレー』刊行の四カ月ほど前、『早稲田文学』に、坪内逍遙の書いた「史論四派」が発表されている。これは坪内が同じ雑誌に書いた論文をうけて、[7]当時のわが国の歴史学界を四派に分類して論じたものである。坪内によれば、第一は事実尊重の「史料批判派(考証派)」であり、第三は「教課用史論派」と「国粋派」から成る「東洋風の応用派」であるが、残りの二派を論じた個所に、まさに当時のイギリス、ひいてはヨーロッパ史学のうけとめかたが如実に示されている。

第二派　は応用史派なり此れにはおのづから二派あり西洋風の応用史派と東洋風の応用史派となり西洋派は英のシーリーと共に固く政治と歴史とは同一研究の殊なる相貌たるに過ぎずという主義を執りて直に史によりて当世の政治を裨益せんと欲するものの如し。……彼等は史を其の文致に於てはマコーレー又はカーライルを学ぶべきものとし其の旨に於てはマコーレー、シーリーの応用主義を奉ずべき者とし事実を重ずるよりはむしろ思索を喜べりかるがゆえに彼等はモンテスキウ、バックル、ドレーパル一流の推論をも強に排斥せざるのみならず少しく形を変へて出で来たらば歓呼して迎へんとする者の如し……

第四派　は一方に於て第二派と接近し又他に於ては第一派に接近し若し得べくんば二派の善美を併せ領して更にマコーレーの所謂円満の史家、即ち詩歌と哲学とを兼用する文学的史家たらんと期するものなり……彼等は此の故に口には其の師マコーレーにひとしく理論の動もすれば事実を曲写する弊あることを説き又時として第一派考証派と共に史材探検の大切なるを説けども……あはよくば科学派をも降服せしめ、西洋風の応用派をも味方とし、尚得べくんば国粋派をも閉口せしめんと期し而して更に余力あらば詩人、文人、小説家をも悉く其の旗下に帰参せしめんと欲望するなり此の派の合言葉(ヲッチワード)は興趣旨味といふことにして其の武器は通俗平易の文字と頓智警句と大胆奇抜の創見なり……[8]

この時点においてすでに、第一の考証派に対するものとして、応用派と第四派を措定し、しかもいずれにおいてもマコーレーをその拠るべき

ひとつの模範と考える傾向が存在したことは明らかである。「詩歌と哲学とを兼用する文学的史家」とは、竹越がマコーレーの『英国史』の成功理由にあげたもののひとつに他ならなかったし、また「通俗平易の文学」もマコーレーの文体の特徴として、竹越が賞讃おくあたわざるところであった。竹越の『新日本史』も『二千五百年史』も、史論としての熱烈な歓迎をうけながらも、実証性の欠除という批判を蒙らざるをえなかった理由は、上に引用した逍遙の描いた史学界の鳥瞰図に照らしてみれば、おのずから明らかであろう。しかしその竹越の大胆な企図を正しく理解していたのは、やはり民友社の生んだ「平民史家」山路愛山であった。「竹越氏は現代の日本青年が泰西の歴史を読んで帰納し得べき人事の法則を以て日本の歴史を解釈せんと試みたり」[9]とは、愛山の『二千五百年史』に寄せた言葉である。その愛山は明治も終りに近づいた明治四十二（一九〇九）年、「日本現代の史学及び史家」を書いて、「多少の史癖ある我らが読みても倦怠を生じやす」く、「試験の参考書に読むものほかはあまり興味を感」ずることのない、考証史家の著作に仮借ない攻撃を加えるとともに、自らの民間史論史学の立場の弁明を試みている。かれによれば、ヨーロッパにおいてもわが国においても、「史学をもって一種の芸術とする古流のものと、考証穿索を主とする新式のもの」の二つが、歴史には存在した。後者は主として「国家の保護によりて」発展したのに対し、前者は「人民とともに」民間において読者の「興趣」に訴え、しかも人心に大きな感化を与えつづけた。そして「ギボン・マコーレー」は前者に、すなわち「読者の心目に英雄・豪傑・匹夫・小人およびその時代境遇を写せしめ、あたかも彫像・絵画・小説が人心に生ずると同じ種類の効果を与えんとするもの」に属している。しかるにこれをさして「古流なり、時勢後れなり、卑俗なりなどいいて一概に排斥せんとする」声が、専門史家、なかんずく第一派の考証史家の間に強い。

我らはこの点において史学を芸術とする我らのいわゆる平民的史家の、なお活動すべき余地の多きを知る。我らはかつてマコーレー卿の『英国史』を読みしとき、人事のパノラマその筆端に活現して院本戯曲を見るよりもさらに大なる興味を感じたりき。いうことなかれ、かかる歴史は古流の歴史のみと。古流といい新式という。要するに盾の半面のみ。興感を主とする歴史が久しき間世に行なわれたるは人心にこれを要求するものありしがためのみ。今や興感を主とする歴史は史学者の重んずるところたらずといえども、かくのごとき興感を求むる人心の要求は永遠に亡ぶべきものにあらず。そのことなるところは、昔の史学は芸術を表とし史実を裏とし、今の史学は史実を表とし芸術を裏とするの差あるのみ。我らはこの見地よりなお現代の史学に、芸術を与え、興味を与うるものの輩出せんことを望むなり。[10]

この愛山の提言の日本史学史上における意義についてはしばらくおくとしても、ここでもマコーレーの『英国史』は、「興感を主とする歴史」の代表作とみなされていることがわかる。これまでしばしば論じられたように、官学アカデミズムと対比される民間史学の特徴は、歴史の全体像構築への強い意欲、またその意欲に支えられた歴史を貫く法則性の認識への志向にあった。その意味で、昭和初年以降急速な展開をみせた、唯物史観に立つ歴史学が、この民間史学の系譜をひくものとみる、家永三郎氏の指摘はまったく正しい。(11) しかし両者をつなぐものは、実践的関心に裏打ちされた「清新な問題設定」だけにあったのではなく、論理構造そのものにも認められるのではなかろうか。本稿でみたように、論壇にデビューした当時の蘇峰の論理構造には、相互排他的な対極概念にもとづく二元論的把握と進歩主義という、明らかにホイッグ史観そのものの論理構造が支配的であった。しかし竹越三叉と山路愛山の場合には、少くとも表面上はホイッグ史観のこの構造に対する認識は後退し、マコーレーの著述を「興感を主とする歴史」として把握するという矮小化がみられるのである。この意味でわが国におけるホイッグ史観の受容という本稿の課題は、視野を昭和初年にまで延長したときにはじめて全面的に答えられるというべきであろう。他日の課題としたい。

註

(1)(2)『マコウレー』二一三ページ。

(3)『文学界』九号、明治二十六(一八九三)年九月三十日、二六ページ。

(4)『マコウレー』四〜五ページ。

(5)『新日本史』(『明治史論集』)一三二〜三ページ。

(6)同右、一三一ページ。なおヒュームの歴史観については、田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』昭和四十六年、未来社、を参照。

(7)逍遙は、『早稲田文学』創刊号(明治二十四(一八九一)年十月)に「史学の風潮」を、また翌年には同誌に「美辞論稿」を発表している。これらについては、小沢栄一、前掲書、二一ページ以下を参照。

(8)「史論四派」(『早稲田文学』三五、明治二十六(一八九三)年、三月)小沢栄一、前掲書、二三〜四ページより引用。

(9)『国民新聞』、明治三十三年(一九〇〇)年七月――小沢栄一、前掲書、五七七ページより引用。

(10)「日本現代の史学および史家」(『日本の名著、40、徳富蘇峰、山路愛山』)四九八ページ。

(11)家永三郎「啓蒙史学」(『日本歴史講座、第八巻、日本史学史』、昭和三十二年、東京大学出版会)――のち前掲『明治史論集㈠』に収録。

〔本学文理学部教授(イギリス史)一九七一、七二年度個人研究員〕